



更田豊治郎氏を偲んで

更田豊治郎さんとの思い出

核データセンターOB
五十嵐 信一
sntigrs31752@palette.plala.or.jp

更田豊治郎さんが亡くなられたとの知らせを、柴田恵一さんからメールで戴いたのがつい先日のように思えたが、既に三月ほどが経ってしまったことに、改めて驚いている。と言うのも、私事で、このような所に書くのも憚られるのだが、私の身内で、四月と五月に二件の忌みごとが続き、少々多忙であるためである。冒頭から変な事を書いたが、そんな訳で、この追悼文が駄文にならないように注意したいと、気を引き締めて、小浦編集委員長のご依頼を引き受けた次第である。

シグマ委員会が発足した1963年ごろ、更田さんはORNLに留学しておられたと記憶している。帰国されたのが何時だったか、はっきりとは覚えていないが、初めてお会いした時の印象としては、極めてスマートで、話振りなどは明快で、歯切れがよく、説得力に優れておられた。この辺りは、多分、水本さんが触れられると思うので、これ以上の蛇足は止めにしておく。

シグマ委員会発足の経緯やその後の活動については多くの所に記述があるのでそれらを見て戴くことにして、ここでは核データセンター設立の経緯について触れておきたい。その理由は、更田さんが尽くされた設立への貢献が非常に大きく、今日の核データセンターの基礎が置かれたと言っても過言ではないからである。更田さんが当時の核データ研究室に來られたのは1974年であるから、シグマ委員会が発足してから10年以上が過ぎていた。この間、学会や民間の研究機関から核データセンターのような中央組織を作るようにとの要望が原研理事長や原子力学会長に出されていたが、辛うじて、核データ研究室が原研物理部に置かれたのが1968年であった。

更田さんは核データ研究室の第3代室長として就任され、研究室としては勿論のこと、

シグマ委員会の事務局としての役割の充実と共に、核データセンター実現のための活動にも努力されることになった。特に、役所（当時は科学技術庁）の担当者の説得のためには、例えば、伏見康治先生のような方々へのお願いなどにも赴かれたようである。この辺のことは核データニュース No.44 のシグマ委員会創立 30 周年記念号に、更田さんご自身が書かれている。核データ研究室のような原研独自の判断で設置できる組織なら、あまり問題は無いようなのだが、核データセンターとなると、科学技術庁の認可組織になるとのことで、手続きが大変になるらしいのだった。役所の案として、核データセンターではなく、核データ管理室の名称が提案されたこともあったようだ。いかにも役人的発想で、これらとの交渉に当られた更田さんのご苦勞が思いやられたものであった。こうした努力の結果、漸く、1977 年 7 月に認可組織としての核データセンターが発足したのであった。

この様な国内でのご苦勞とは別に、更田さんは国際的な活動にも大きな貢献をされた。例えば、OECD/NEA の核データ委員会 (NEANDC)、IAEA の核データ委員会 (INDC) や専門家会議などでは、日本の活動を良く紹介された。日本の核データ活動のレベルの高さが国際的に認められるようになったのもこの時期であった。

小休止のつもりで、少々おかしな話を紹介する。この当時、各国が IAEA の INDC に提出するレポートにはレポート番号に提出国の略名が付与されていた。この略名として、日本のレポートには JAP が使われていた。これは、戦時中アメリカが日本を軽蔑して用いていたもので、更田さんはこれを大変嫌われて、何度か訂正を要請されたのだが、なかなか直してくれなかった。確か 1980 年代になっても直っていなかったように記憶している。その後、JPN に直ったと思うが、どんな経緯だったかは一寸記憶が定かでない。

1979 年の 6 月になって、突如、更田さんの企画室配転が発表になった。私は非常に驚き、また、残念であった。これまで一緒にやってきて、シグマ委員会を中心にした日本の核データ研究活動が世界的にもかなりの高水準になり、また、JENDL-1 を改訂して JENDL-2 を作ろうとしていた時期だったからである。しかし、更田さんの栄転でもあり、止む無くあきらめたのであった。勿論、更田さんは企画室員での立場から、陰に陽に、核データセンターへの支援を惜しむことはなさらなかった。

更田さんとの思い出で、忘れてはならないことの 1 つが、1988 年の 5 月 30 日から 6 月 3 日まで、水戸市のプラザホテルで開かれた「科学と技術のための核データ」国際会議である。この国際会議は欧米各国の持ち回りのような形で、3 年ごとに開かれていた。1984 年にあった原研東海研での NEANDC 会議で、アジア地域では初めての開催として、日本での開催が提案された。日本では勿論初めてのことなので、役所は勿論のこと、物理学会や原子力学会への説明、協力依頼など、多岐にわたる運動が必要であった。この当時、更田さんは原研東海研の副所長になっておられ、色々な面で助けて戴いた。特に、国際プログラム委員会の委員長をお願いして、質の高い会議になるように助言を戴いた。この会議については核データニュース No.31 などを見て戴ければ、より良くお分かりいただけると

思う。

更田さんは1989年から原研の副理事長に就任された。私はこの年の9月末を以って原研を定年退職し、(財)原子力データセンター(NEDAC)に移籍した。ここは現在の高度情報科学技術研究機構(RIST)であるが、更田さんも1993年4月から理事長としてこのNEDACに来られた。更田さんが優れた研究者であることについては言を俟たないが、もう1つの優れた面は、経営者として、常に新しく活性化した組織を考え、それを現実の物に上げていく点である。今日、世間ではinnovationなる言葉が持て囃されているが、更田さんは既に核データ研究室を核データセンターに格上げされ、東海研の副所長時代には物理部の改組を実行され、また、NEDACではRISTへの改組を行うなど、常にinnovativeであられた。私は1994年3月でNEDACを辞め、東海村を去ったので、NEDACからRISTへの改組は直接見聞していないが、後日、このことを知り、流石は更田さんだと感嘆したものであった。

最後に、私的な話をして、更田さんとの思い出を締めくくろうと思う。先に、更田さんがORNLから帰国された当時の話をしたが、その頃、私は単身赴任をしていて、原研の第2独身寮の一室を借りていた。更田さんは核物理第2研究室に所属されていたが、やはり、単身赴任であった。最初は第1独身寮の部屋を借りておられたが、何時の頃だったか忘れたが、第2独身寮に移られた。それが偶然にも、私の部屋と同じ階の1部屋置いた部屋に住まわれることになった。従って、更田さんが核データ研究室から核データセンターを経て、企画室に移られた5年間ほどの間、公私に亘っておつき合い戴くことになったのであった。この間の思い出も数々あるが、限りが無いので止めておく。

こうして50年ほど前のことから思い出してみると、実に様々な事が思い出されてきて、懐かしいやら淋しいやら、胸が詰まり、年甲斐もなく涙が出てくる。更田さんは本当に良い先輩であり、上司であり、友人であった。謹んで、ご冥福を祈るのみである。さようなら、更田豊治郎さん。